

学位授与申請者の一般・教養科目単位修得状況調査Ⅱ
—短期大学を基礎資格とする申請者(看護学)について(平成13年度),
専門学校との比較—

The Result of Surveys of Credits of General Education Courses Accumulated
by Applicants in Nursing who Completed Junior Colleges
in Comparison with Those who Completed Special Training Colleges

八木 克道
YAGI Katsumichi

1. はじめに	115
1.1 前報告の概要と本調査・分析の目的	115
1.2 科目の分類方法	116
2. 調査結果	117
2.1 申請者の分類	117
2.2 単位修得状況	118
2.2.1 「専門科目」, 「関連科目」の単位修得状況	118
2.2.2 「専攻外科目」の科目別単位取得状況	119
2.2.3 「一般・教養科目」の総取得単位	123
3. まとめと考察	126
付録1 アメリカの大学における卒業要件と一般・教養科目単位取得要件の事例	130
ABSTRACT	131

学位授与申請者の一般・教養科目単位修得状況調査Ⅱ —短期大学を基礎資格とする申請者（看護学）について（平成13年度）、 専門学校との比較—

八木 克道*

1. はじめに

1.1 前報告の概要と本調査・分析の目的

学校教育法の改正によって平成10年度から、一定の要件を満たした専門学校修了生が大学へ編入出来ることとなり、それに伴って専門学校修了生も、短期大学、高等専門学校卒業生と共に大学評価・学位授与機構に学士の学位取得申請を行うことが出来ることとなった。その際、専門学校は大学や短期大学に比べて職業資格取得のための専門に特化した教育機関であるので、いわゆる一般・教養教育の学習が少ないことが危惧され、今後の調査を見ることとされた。しかし、そのような調査は行われなかった。著者は前報告¹「専門学校を基礎資格とする学位取得申請者の専攻外科目の単位修得状況調査—平成13年度申請者について」（以下「前報告」と記す）において、専門学校修を基礎資格とする申請者（232名）について、調査を行った。申請者の専攻区分は看護学と保健衛生学に殆ど限られていた。

修得科目を、「専門科目」、「関連科目」と「専攻外科目」に大別し、さらに全体から、「人文・社会系科目」、「数学・自然系科目」、「外国語科目（小例の国語を含める）」、「情報・コンピューター系科目」、「保健・体育系科目」、「その他」の科目（宗教系科目など教育機関に特異的な科目、総合科目、専攻外の専門科目などが含まれる）を抽出、分類した。「その他」の科目を除いたものをまとめて「一般・教養科目」と記した。「専攻外科目」の上記分類は、大綱化以前の一般教養科目の分類と同じである。吉田ら²の2003年の調査結果によると、「大学の9割以上の学部が、英語、人文・社会、自然の3系列、英語以外の外国語、心身の

健康に関する科目のなど旧一般教育科目、ならびに情報リテラシーを開講している。」とあり、本報告での分類が、大綱化後の現在でもある程度通用する分類であると思われる。

前回の調査結果では、基礎資格校である専門学校での「一般・教養科目」の修得単位の全員の平均は21単位ほどであった。専攻区分によって14～15単位から、27～28単位までに分布している。少ない修得を示す専攻区分は「数学・自然系科目」の修得が少ない看護学（17.3単位）と栄養学で、栄養学の場合、「外国語科目」の修得が少ないために14.7単位とさらに平均値が低くなっている。個々の申請者でみると、修得単位が9単位以下の者が2名（6単位と9単位）、15単位以下の者が総計45名（19.5%）である。看護学ではその半数近い申請者がこれに属する。

「一般・教養科目」の積み上げ単位については、専門分野、学習歴や個人による違いが大きかった。特に少ない積み上げの者を調べた結果、0～5単位と少ない単位を積み上げた者は51名（22%）であった。そのうち専攻科を經由した23名を含む看護学の31名が大きな割合を占めている。半数近い申請者が基礎資格取得後に多くの「一般・教養科目」を学習している。多く積み上げている者の殆どが放送大学を主とする大学入学者や同大学の科目等履修生であることから、単位積み上げにおける放送大学の役割が大きいことが示唆された。

また、「一般・教養科目」について総計した結果、少ない単位取得者として分類した20単位以下の単位取得者は31名（13%、最低9単位）である。この中に、看護学の24名（看護学の申請者の36%）が含まれている。30単位以上取得した者は130名

* 独立行政法人大学評価・学位授与機構 学位審査研究部 教授

で半数以上となる。

専門学校は多くの場合職業資格取得を目標として設置されているので、「前報告」で分析した申請者の殆どは看護学（66名）と保健衛生学（116名の放射線技術科学以外は23名以下）の3年制の専門学校修了者であった。基礎資格取得後の学習歴は専攻区分ごとに特徴があり³、調査対象の中では、看護学への申請者だけは、短期大学の専攻科に進学して単位を積み上げる者、科目等履修制制度によって単位を積み上げる者などいろいろな学習歴の者が含まれていた。保健衛生学の場合155名中専攻科に進学したものは放射線技術科学の9名だけであった。その看護学は、機構への学士取得申請の際に短期大学卒業を基礎資格とする申請者も多く、機構側から見て基礎資格の違いによる「一般・教養科目」の修得状況の違いを調べる専攻区分である。その上、基礎資格取得後に専攻科で単位を積み上げる者と科目等履修生として単位を積み上げる者とが拮抗しているので、基礎資格取得後の学習歴による「一般・教養科目」の単位取得状況の違いについても併せて知見が得られる専攻区分である。また、看護学は職業資格取得のために多様な教育施設が存在すると同時に、3節の「まとめと考察」でも触れるように、今回の結果を国内外の4年制の学士課程での状況と比較することも可能である。そのような観点から、今回、同じ年度に短期大学を基礎資格として看護学で学位を申請した200名⁴について単位修得状況を調べた。前年度に単位の審査に合格して、学修成果と試験だけの審査を申請した者は除いている。基礎資格取得後の学習歴による違いによる比較を行う目的で前回分析した看護学で申請した専門学校修了者66名についても、再度分析したのでその結果も合わせて述べる。^{*}

1.2 科目の分類方法

科目の分類は「前報告」と同じである。記述が重なるが具体的に述べる。まず、機構の行う修得単位の審査の際に用いる分類に従って、各申請者の修得科目数を「専門科目」、「関連科目」、「専攻外科目」に分類し、基礎資格校での修得単位数と

積み上げ単位数を記録した。これについて、機構における専門委員会での科目分類判定結果を用いた。

次に「一般・教養科目」と思われる科目を申請書の全修得科目表から抜き出して記録した。抜き出しは多くの大学において一般・教養科目として分類されていると思われる科目の名称のものについて行った。シラバス等を用いた分類をしていないので、微妙なところはシラバスまで用いた判定と異なる可能性があることをお断りしておきたい。抜き出しは全科目、すなわち、機構が分類した「専門科目」、「関連科目」、「専攻外科目」すべてから行った。このような抽出、分類をしなければならぬ理由は、得られた結果を大学等での一般・教養科目の修得単位数などと比較をしたいため、「前報告」で詳細に述べたように機構の分類方式ではそれが困難であるからである。

抜き出した科目は、既に述べたように「人文・社会系科目」、「数学・自然系科目（統計を含む）」、「外国語科目（僅かな事例の国語を含む）」、「情報・コンピューター系科目」、「保健・体育系科目」、「その他」の科目（「専門科目」、「関連科目」及び前6項目に属さない科目）の7項目に分類した。宗教系の短期大学における宗教教育（「聖書」、「天理教」など）、学校の特徴に根ざすもの（「赤十字概論」など）、地域に根ざすもの（「同和教育」など）は「その他」の科目に含めた。短期大学卒業後、異なる専攻分野で大学に編入学して学習・卒業した場合などは、そこで修得した専門科目は「その他」の科目となる。これには、単純に自然系や人社系には分類できない4文字や6文字系の総合科目、放送大学等における上記分類には馴染まない教養関連科目（たとえば、日本人口論、現代社会の学力、ビジネスマナーなど）と思われるものなども入る。従って、「その他」の科目を多く履修した申請者は、中身の詳細は別としてその分だけ「幅広く学習した者」と評価されうるが、逆に、「その他」の科目やそれ以外の6項目に分類された科目の修得が少ない申請者は、「一般・教養科目」の履修が少ないと評価されることになる。

^{*} 放射線技術科学、検査技術科学の専攻区分の場合も、短期大学卒業者の申請者数が多いので、基礎資格による違いを調べることの出来る専攻区分である。今後の課題である。

2. 調査結果

2.1 申請者の分類

短期大学卒業生の申請者200名のうち2年制短期大学修了者は3名、残りの197名は3年制の短期大学卒業生である。前者の3名の内2名は専攻科（看護学の認定専攻科は全て1年制である）を修了し、さらに不足の単位を放送大学で積み上げている。1人は看護学のある大学と放送大学で科目等履修生として単位を積み上げている。3人と他の申請者と比較した場合、2年制ということもあって「専門科目」の修得単位数は確かに少ないが、本稿で注目している一般教養科目の修得単位数が、200名の中で少ない方に集中しているということはないので、以下の分析においては区別せず200名全員について行った。

200名の内120名が専攻科に進学し、80名は専攻科に進学せずに科目等履修生（少数の大学編入者を含む）となっている。

120名の内、同じ大学の専攻科に進学した者は67名で半数より少し多い程度である。また、専攻科だけで単位取得したのは見込み申請の者27名を含む38名である。残り82名は放送大学（45名）や特定の大学の医学部（31名）、福祉系学部（6名）で単位の積み増しを行っている。特定の大学の医学部で単位を積み上げた者は共通のパターン化した単位取得（「人文・社会系科目」6単位、「外国語科目」2単位、「情報・コンピューター系科目」2単位）をしているので、「前報告」で放射線検査科学の半数の申請者が特定の大学の特別コースで類似した単位積み上げを行っていたことを考慮して分析する必要があったのと同様に、今回も分析に於いても注意が必要である。このように専攻科に進学しながら、科目等履修生制度で単位を積み上げているのは、この調査を行った平成13年度から積み上げ単位に「4年制の大学の16単位を含むこと」という条件がなくなったにも拘らず、その要件の変更を知らないで、専攻科での学習に加えて大学の単位を修得した申請者が含まれているためであろう。

専攻科に進学しなかった80名の学習歴の内訳は次の通りである。放送大学だけで単位を積み上げた者は55名と多く、放送大学と看護系大学（科目等履修）（13名）、看護系専攻科（科目等履修）

（1名）、他分野の大学（科目等履修および編入学後の退学、卒業も含む）8名、放送大学を利用しないで、大学の医学あるいは人間体育学科でだけ単位積み上げを行った者3名である。その結果、200名中放送大学を利用しなかった申請者は41名で、全体の5分の1にすぎない。大学での16単位修得の要件が外れたので、専攻科進学者は放送大学を利用しなくなるであろうが、専攻科に進学しないで単位積み上げを行う者にとっては放送大学の役割は減じることはないであろう。

専門学校修了生の申請者は「前報告」の表2-1にあるように、66名中37名が専攻科修了生で、27名が放送大学を含めた大学入学、科目等履修生として単位を積み上げている。

これらをまとめた短期大学卒業後、専門学校修了後の学習歴の分布を図1に示す。

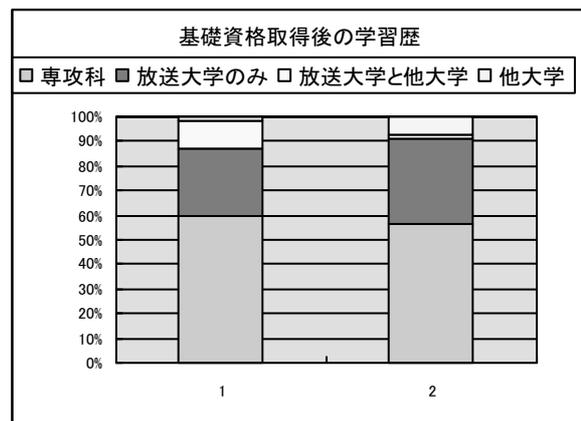


図1 基礎資格取得後の学習歴

1. 短期大学卒業生
2. 専門学校修了生

専攻科修了生と専攻科に入学せず科目等履修によって単位積み上げを行った者とは、短期大学の学習時期が異なることが予想される。これについては平成10年4月期までの短期大学や高等専門学校卒業を基礎資格とする申請者全員についての年齢の分析で、ほぼ10年の年齢差があることが示されている⁵。今回200名について短期大学卒業年（年齢でなく学習時期）を調べた結果を図2に示す。専攻科修了生は平成2年以降の短期大学卒業生であり、見込み申請の25名を含めて申請時の2-3年前に卒業した者が多数（69%）を占めている。一方、科目等履修生で単位積み上げを行った者の分布は大きなピークを示さない。彼らは昭和53年以降の卒業生で、申請時の2-3年前に卒業した

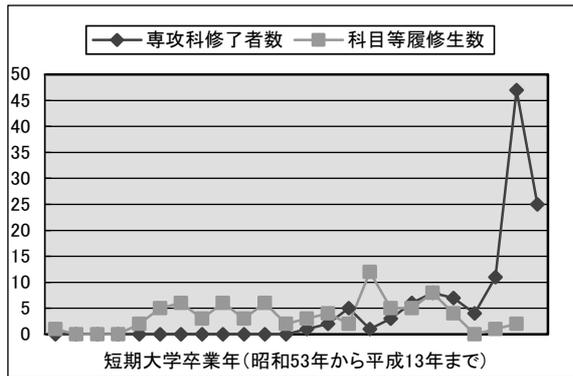


図2 専攻科修了生と科目等履修生の短期大学卒業年分布 (1年毎)

者は殆どいない。大綱化の答申以前に入学した者(平成5年卒業)は55名(69%)である。全体をならすと平均で10年程度の学修時期の違いがあると言えよう。その違いによって短期大学での「一般・教養科目」の科目取得に差異がある可能性が予想される。以下では、それぞれのグループを便宜上『専攻科群』, 申請時には成人であると思われるので『成人・科目等履修群』と呼ぶことにする。成人・科目等履修群には、大学に編入学した一部の者も含めている。

専門学校の場合についても修了年を新たに調べたのでその結果を図3に示す。人数が少ないので、2年まとめた数をプロットしている。専攻科群の分布は広がっているが、やはり基礎資格校での学修時期が平均して10年程度の隔たりがあることが分かる。

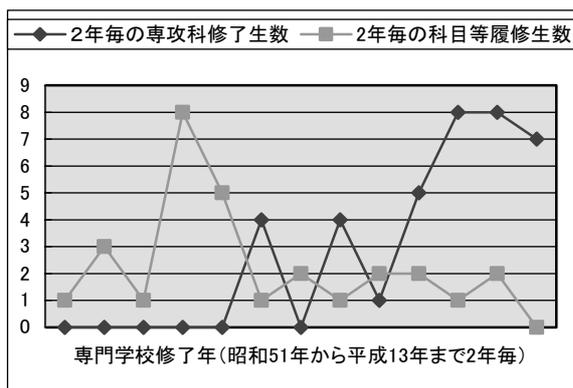


図3 専攻科修了生と科目等履修生の専門学校卒業年分布 (2年毎)

以上の結果は前報告⁵と同様な学修時期の違いが、看護学の1分野について、また、短期大学、専門学校それぞれを基礎資格校とする者についても存在することを示している。

2.2 単位修得状況

基礎資格校での単位修得は、短期大学と専門学校とで異なることが予想され、その解析が本稿の主目的である。しかし、上述したように専攻科群と成人・科目等履修群でも異なることが予想され、実際後述するように違いが示されたので、それらについての分析結果も併記して述べる。以下各科目について述べるが、それぞれについて、基礎資格校での修得(短期大学, 専門学校の順), 積み上げ単位(短期大学, 専門学校の順)の4区分の順序でのべ、それぞれについて専攻科群, 成人・科目等履修群と分けて記述することとする。以下では、修得単位の様子をそれぞれのグループの平均値で示す。各グループでの平均値の違いが有意であるかどうかの目安として、申請者ごとの修得単位数の分布の広がりを示す標準偏差を必要に応じて記す。少ない単位の修得者数(その割合)も履修の様子を示すので場合に応じて記した。平均値が小さい場合は、単位数や標準偏差よりも、履修した申請者の割合を表す履修率の方が履修の様子をよく表しているの、その場合は履修率を記した。

2.2.1 「専門科目」, 「関連科目」の単位修得状況

「専門科目」, 「関連科目」の短期大学での取得単位数の平均は、それぞれ59.7単位, 23.4単位である。標準偏差は6.7単位と6.3単位である。専攻科群の場合58.6単位(標準偏差6.0単位), 23.8単位(標準偏差5.5単位), 成人・科目等履修群の場合, 61.3単位(標準偏差7.4単位), 23.4単位(標準偏差7.4単位)であり、成人・科目等履修群の方が専門科目の取得単位がやや多くなっているが有意な差ではない。「専門科目」の単位は短期大学毎で大きく変わらないため標準偏差が平均値の1/9程度と小さな値となっている。成人・科目等履修群の標準偏差が大きめなのは、図2に示すような卒業年代の広がりが一因かもしれない。「関連科目」の場合、標準偏差が平均修得単位の1/4~1/3程度と大きくなっている。これは申請者によって修得単位数が大きく違うためである。例えば、平均が23.4単位であるにも関わらず10単位未満の申請者が80名中6名も存在している。

専門学校の場合、「専門科目」は平均67.1単位、「関連科目」は平均20.9単位取得している。「専門

科目」は専門学校の方が7単位多く、「関連科目」は逆に3単位ほど少ない。

短期大学卒業生の積み上げ単位は、平均して「専門科目」16.7単位（標準偏差11.5単位）、「関連科目」16.2単位（標準偏差8.1単位）である。専攻科群の場合それぞれ25.2単位（標準偏差5.5単位）と12.9単位（6.7単位）で専門関連の科目を当然多く学習している。成人・科目等履修群では、それぞれ3.8単位（標準偏差4.0単位）、21単位（標準偏差7.8単位）となり、専攻科群と比べて「専門科目」が少なく、「関連科目」が多くなる。特に放送大学だけで単位を積み上げた49名の場合、それぞれが2.1単位と23.0単位と専攻科群とは極端な違いを見せている。

専門学校卒業生の場合の積み上げ単位は「前報告」で既に述べたように、上記と全く同様に、専攻科群と成人・科目等履修群とは「専門科目」と「関連科目」の取得単位数の大小関係が逆になる傾向がある。

2.2.2 「専攻外科目」の科目別単位取得状況

○ 人文・社会系科目

短期大学卒業生全体では平均して9.8単位ほど取得している。標準偏差は3.3単位である。3 - 5 単位取得の者が9%存在する一方で、15単位以上取得している者が7.5%存在する。専攻科群と成人・科目等履修群ではそれぞれ9.0単位（標準偏差3.0単位）、11.2単位（標準偏差3.3単位）である。平均値の違い2.2単位に対して標準偏差が3単位ほどであるので、2つのグループの違いは有意であるといえよう。大綱化以前に学修した者が多数を占めている申請者のグループの方が多く学修しているといえよう。平均値と標準偏差をグラフにしたのが図4の左側（短期大学）の●印とバーの長さである。

専門学校の場合の同様な結果を図4の右側に示す。全体では6.8単位（標準偏差3.8単位）であるので、短期大学では3単位ほど多く学習していることになる。それぞれの標準偏差（3.3単位、3.8単位）の値から考えて有意な差と考えることが出来る。標準偏差3.8単位は、短期大学卒業生の場合に比べて平均値が小さいにも拘らず大きくなっている。これは、専攻科群の5.4単位（標準偏差1.7単位）と成人・科目等履修群の8.6単位（標準

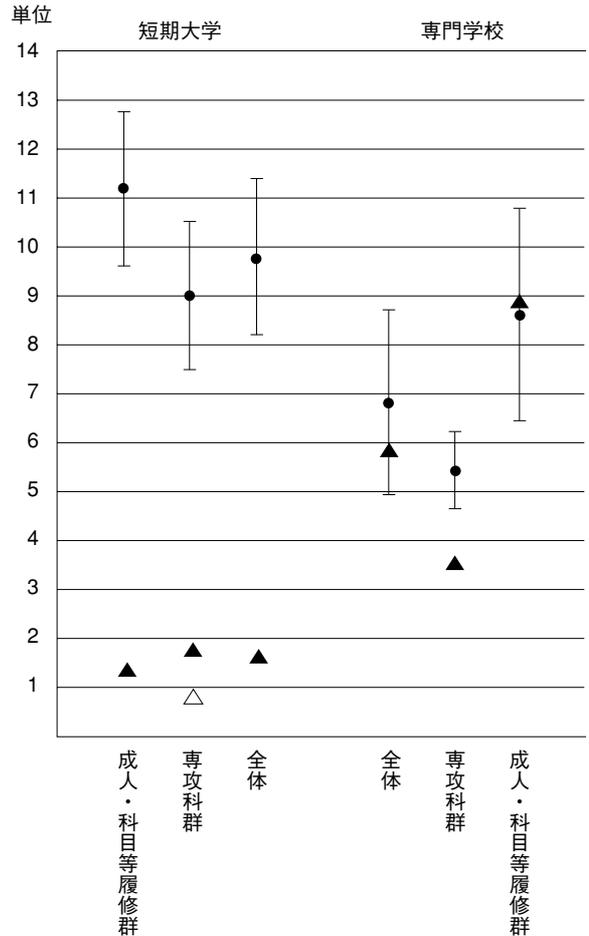


図4 人文・社会系科目修得状況

偏差4.8単位)の2つのグループの存在によっている。専攻科群の標準偏差は全体の標準偏差の半分程度であり、ほとんど類似な学修をしていることになる。一方、成人・科目等履修群の標準偏差は大きく4.8単位となるが、専攻科群との平均値の差3.2単位とを勘案すると、両グループの差は有意なものと考えられ、図4からも分かる通り全体の分布は、シャープな専攻科群の分布に、3.2単位離れた所をピークとする幅の広い成人・科目等履修群の分布が重なったものとして理解できる。成人・科目等履修群が多く学んでいることは短期大学の場合と同じである。基礎資格によらず専攻科群の履修単位が少ない様子は、図4の●のプロットが左も右もV字形となっていることとして視覚的に捕らえられる。

「前報告」で少ない単位取得者として分類した「取得単位が3単位以下の申請者」の割合は短期大学修了者の場合0.5%で、専門学校の場合の4%と比べて非常に少ない。(後出図12参照)

短期大学卒業生の積み上げ単位は平均して1.6

単位である。図4で▲印で示した。専攻科群の場合1.8単位と多い。専攻科群の平均値を大きくしているのは、2.1節で述べたある医学系の大学で提供する科目を共通して学んでいる申請者(31名)で、彼らは前述したように6単位積み増している。彼らを除くと積み上げの平均は半分の0.8単位となる(図4の△印)。予想されることではあるが、専攻科だけで単位を積み上げた者で「人文・社会系科目」の単位を積み上げた者はいない。成人・科目等履修群は1.4単位積み上げており、上記の0.8単位より多い。図4で特殊な学習者を除いた△印を選ぶと、三角印においてもV字形が見て取れる。成人・科目等履修群の中で、放送大学だけで単位を積み上げた申請者の場合は0.5単位と平均値以下で、それ以外の者、すなわち放送大学以外でも科目等履修を行っている者は平均2.6単位となる。

専門学校修了生の積み上げ単位数は5.8単位であるが、その結果、総計では短期大学修了者の場合の11.4単位を上回って12.6単位となってしまう。短期大学卒業生の場合と同様に専攻科群の3.5単位より成人・科目等履修群の方が8.9単位と多くなっている(V字形)。成人・科目等履修群の中から、放送大学だけで単位を積み上げた者を選んで積み上げ単位の平均を求めると、短期大学の場合の0.5単位とは大きく異なり8.9単位となる。積み上げ無しの申請者もいる代わりに沢山積み上げた申請者がいるためである。

○ 数学・自然系科目

人文・社会系科目の場合と同様にまとめた結果を図5に示す。すべてのプロットでV字形の特徴がある。

短期大学で平均して6.2単位ほど取得している。標準偏差は2.6単位である。0~2単位取得者が12.5%いる一方で、10単位以上の取得者が11.5%いる。専攻科群と成人・科目等履修群ではそれぞれ5.4単位(標準偏差2.6単位)、7.3単位(標準偏差2.3単位)であり、その差は有意である。大綱化以前に学修した者が多く含まれるグループの方が1.9単位ほど多く学修しているといえよう。

専門学校では平均して3.6単位(標準偏差2.2単位)の取得であるので、短期大学の場合より2.8単位ほど少なく学習していることになる。それぞ

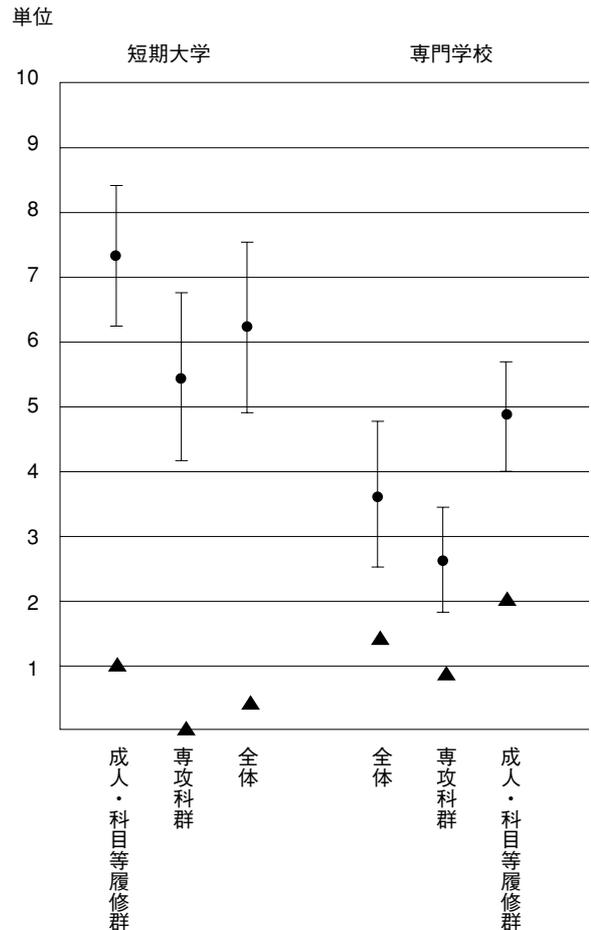


図5 数学・自然系科目修得状況

れの標準偏差の値と比べても違いが大きいの、両者の差は有意であると言えよう。専門学校修了生の場合も2つの群で有意な差があり、専攻科群2.6単位(標準偏差1.7単位)、成人・科目等履修群4.8単位(標準偏差1.7単位)の単位取得となっている。

「前報告」で少ない単位取得者として分類した「取得単位が3単位以下の申請者」の割合は短期大学卒業生の場合18%とかなりの割合であるが、専門学校修了生の場合の44%と比較すると、半分以下となっている。(後出図12参照)

短期大学卒業生の積み上げ単位は平均して0.4単位で、専攻科群では、大学で科目等履修生として単位を積み上げているか否かにかかわらず殆ど学習していない(0.04単位、履修率2%)。成人・科目等履修群の場合平均1.0単位取得している(履修率29%)。

専門学校修了生の場合、積み上げ単位は1.4単位で、「人文・社会系科目」の場合と同様に専門学校修了生の方が1単位ほど多い。やはり、専攻

科群（0.9単位，履修率14%）と科目等履修軍（2.0単位，履修率55%）とで違いがある。基礎資格校での取得単位数を合わせた合計では，基礎資格での違いが反映されて短期大学卒業生の方が多くなっている。

○ 外国語科目（国語を含む）

まとめた結果を図6に示す。一部を除いて，有意とは言えないまでも，V字型が現れている。

短期大学で平均して5.2単位ほど取得している。標準偏差は1.4単位と小さく，3単位の者が1.5%，9単位の者が同じ1.5%で，残り97%の者が4～8単位取得している。専攻科群5.2単位，成人・科目等履修群5.1単位と専攻科群がわずかに多いが，有意な差ではない。外国語の履修の必要性の認識は，大綱化前後で変わっていないためと思われる。

専門学校の場合，全体の平均は4.7単位（標準偏差1.8単位）であるので，短期大学の場合と変わらないといえる。短期大学に比べて平均値が小さいのに標準偏差が少し大きいのは，専攻科群4.2単位（標準偏差1.2単位），成人・科目等履修群

5.3単位（標準偏差2.2単位）で違いがあるためと，成人・科目等履修群の標準偏差が大きいためである。

「前報告」で少ない単位取得者として分類した「取得単位が3単位以下の申請者」の割合は1.5%であるが，この値は専門学校修了生の場合の16%に比べて非常に少なくなっている。（後出図12参照）

短期大学卒業生の積み上げは平均して1.0単位である。専攻科群では0.9単位で（履修率48%），これからある大学の医学部で単位を積み上げた31名の寄与を除くと小さくなる（履修率30%）。専攻科だけで学んだ者の場合0.1単位と極端に少ない。成人・科目等履修群の場合は1単位程度である（履修率33%）。

一方，専門学校修了生の場合積み上げ単位は1.5単位で，「人文・社会系科目」の場合と同様に専門学校修了生の単位取得は0.5単位ほど多く，総計では短期大学修了生の場合と同じになっている。専攻科群は0.7単位（履修率11%），成人・科目等履修群は2.6単位（履修率55%）となって，差が見られる。

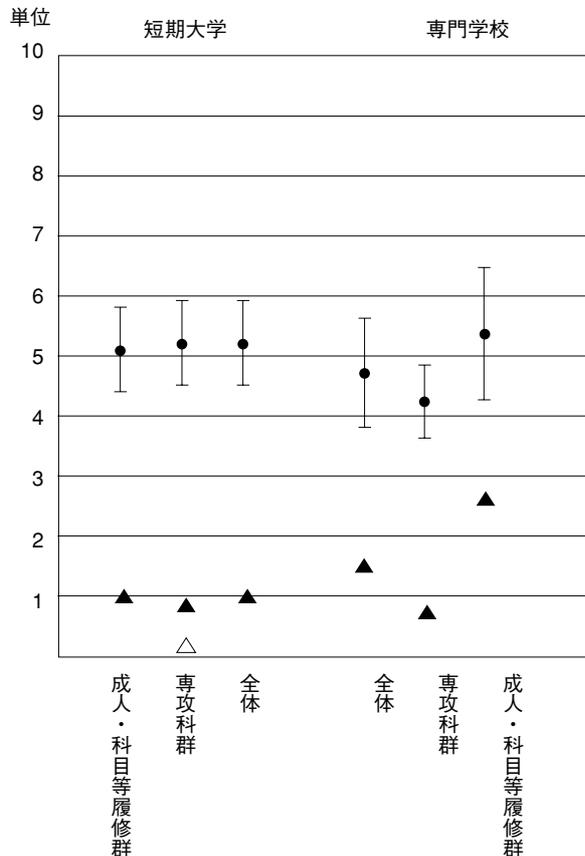


図6 外国語科目修得状況

○ 情報・コンピューター系科目

この科目群を以下では「情報系科目」と略記する。短期大学では平均して0.5単位（履修率40%）ほど取得している。専攻科群は0.7単位（53%），成人・科目等履修群は0.3単位（23%）である。取得単位は0，1，2単位に分布するので，差が有意であるかを標準偏差等で確認することは出来ないが，履修率では大きな差が読み取れる。

専門学校修了者の場合は平均すると0.3単位で，履修率23%である。履修率は専攻科群の場合は32%で，成人・科目等履修群の場合は10%で，やはり大きな差があると考えられる。

短期大学卒業生の場合，平均0.4単位ほど積み上げを行った後でも履修率は50%である。専攻科群では最終履修率が67%と14%ほど増加するが，成人・科目等履修群の場合は25%と2%しか増加していない。

専門学校修了生の場合，0.4単位ほど積み上げている。履修率は専攻科群の場合68%と増加するが，成人・科目等履修群の場合は増加せず10%のままである。

以上の結果は、基礎資格によらず、基礎資格取得年が新しい申請者グループである専攻科群の申請者が、基礎資格校在学中や単位積み上げ過程で「情報系科目」の単位取得をしているといえよう(後出図13参照)。

積み上げ単位を行った後を含めた単位取得過程を「前報告」と同様に、修得単位なし、積み上げ単位のみ、基礎資格校のみ、両方で取得の割合に分けてグラフ化して示し、専門学校の場合と比較したのが図7である。

短期大学修了生の場合には全体の10%に相当する未履修者が学修して、あわせて50%の申請者が情報系の科目を学修したことになる。

専門学校修了生の場合には、基礎資格校で学んだ者の割合が少ない。両方で単位取得した申請者の割合は短期大学と変わらない。積み上げ単位のみ申請者が全体の20%おり、全体で43%の申請者が「情報系科目」を学修していることになる。

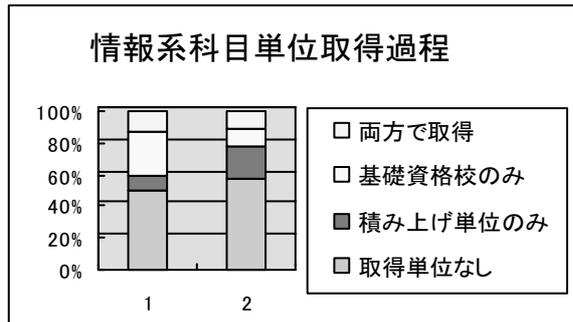


図7 情報系科目単位取得過程

1. 短期大学卒業を基礎資格とする者
2. 専門学校修了を基礎資格とする者

○ 保健・体育系科目

短期大学では全員この科目を履修している。全体で2.2単位(標準偏差0.64単位)、専攻科群1.9単位(標準偏差0.58単位)、成人・科目等履修群2.6単位(標準偏差0.52単位)となつて、平均では専攻科群が有意で少ない値である。

専門学校では、上の順番で2.0単位、2.1単位、1.9単位となり、その違いは小さい。

図8は、基礎資格校での修得単位数ごとの割合を専門学校と比較したものである。専門学校に比べて3単位以上取得した申請者の割合が多い。

積み上げを行った者は、成人・科目等履修群に7人いるだけである。専門学校の場合も66人中10名とやはり少ない。

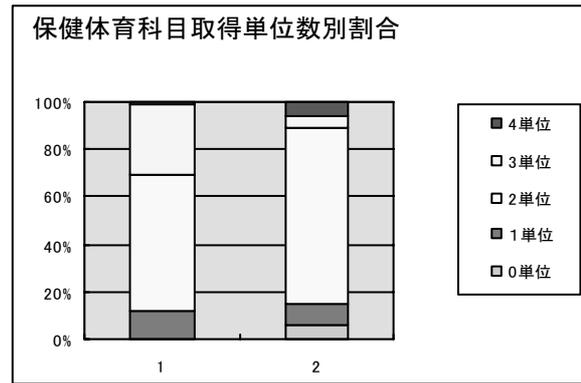


図8 保健体育科目の取得単位数別人数割合

1. 短期大学卒業を基礎資格とする者
2. 専門学校修了を基礎資格とする者

○ 「その他の科目」

短期大学でこの分類の科目を履修したものは、31人で履修率は15.5%である。履修率は専攻科群21%、成人・科目等履修群6%である。専攻科群が学んだと思われるより新しいカリキュラムでは、従来型の「一般・教養科目」に分類できない総合的な科目が増えた可能性が示唆される。履修者は平均して2.8単位取得しているが、全員でならずと0.4単位となる。

専門学校で取得したのは15人(24%)で、10単位以上と異常に多い3人を除くと、平均して2.8単位となり、短期大学の場合と変わらない。2つの群での履修率は20%台で大きくは変わらない。

短期大学卒業生が積み上げた「その他」の科目の単位を平均すると8.5単位である。標準偏差が10.8単位であるから、少ない者と極端に多い者が混在していることが分かる。大きな標準偏差の原因は、(1)専攻科群の場合は積み上げ単位の平均が2.9単位で、その内専攻科だけで単位を積み上げた者は0.7単位と極端に少ないこと、(2)成人・科目等履修群の場合は、放送大学だけの学習で申請した者も、他大学での学習を含めて申請した者も大きく変わらず、平均して16~17単位修得していること、というように取得単位数の大きく異なる2つのグループが存在するからである。

専門学校修了生の積み上げ単位数は、平均すると8.3単位で、短期大学卒業生の場合と殆ど同じ値であるが、標準偏差はさらに大きく16.8単位である。大学に編入学して看護学以外の専門を学んだ申請者の影響が含まれている。専攻科群の積み上げ単位の平均値5.2単位は成人・科目等履修群の12.2単位と比べて少ないという傾向は、短期大

学の場合と同じである。

2.2.3 「一般・教養科目」の総取得単位

「一般・教養科目」の総単位取得状況を図9に示す。これまで見られたV字型の特徴が総計されて現れている。

短期大学での「その他」の科目を除いた「一般・教養科目」の総取得単位数の平均を求めると23.9単位となる。標準偏差は5.9単位である。専攻科群と成人・科目等履修群ではそれぞれが22.2単位(標準偏差5.5単位)、26.4単位(標準偏差5.5単位)となり、これまでに述べてきた違いが総計されて4単位ほどになったことになる。全体の標準偏差に比べて、個々の標準偏差が小さくなることから、この総計における差は有意な差であるといえよう。

専門学校での平均取得単位数は17.3単位(標準偏差6.5単位)であるので、短期大学では「一般・教養科目」を平均して6.6単位程多く学んでいることになる。それぞれの標準偏差の値と同程度であり、6.6単位の違いは有意な差と言えよう。専門学校の場合、平均値が短期大学の場合に比べて

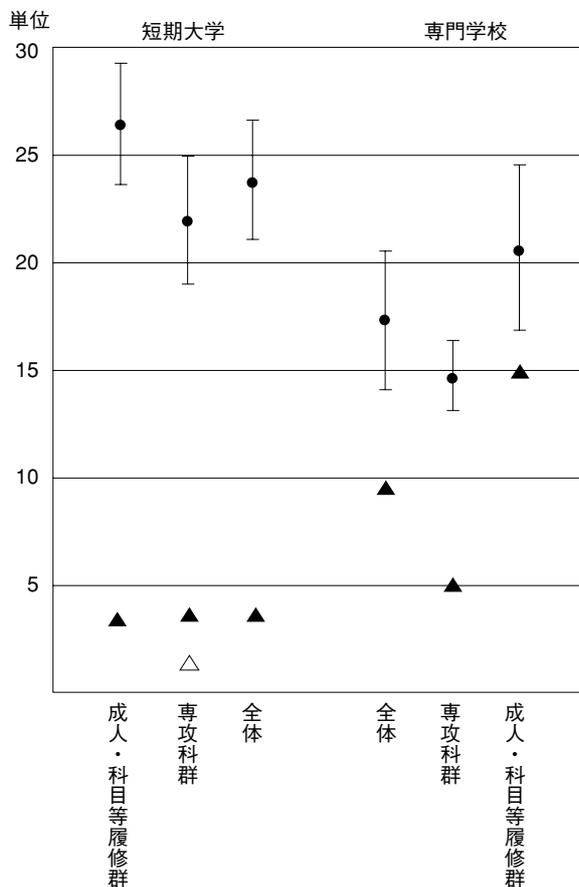


図9 「一般・教養科目」単位修得状況

小さいのに、標準偏差は逆に多くなっている。それは専攻科群と成人・科目等履修群のそれぞれの値が、14.7単位(標準偏差3.3単位)、20.7単位(標準偏差7.8単位)と6単位も違いがあることが原因している。専攻科群の標準偏差は3.3単位と全体の標準偏差の半分であり、また両グループの差の半分程度である。従って図9の右側のグラフからも分かる通り有意な違いといえる。

基礎資格の違いによる、平均値の違いは上述したように、「人文・社会系科目」3単位、「数学・自然系科目」2.6単位の差が担っている。それぞれを2つの群に分けて、違いを図示したのが図10である。

違いが、上記2つの科目群に存在すること、最近の短期大学卒業生の「一般・教養科目」の学修は、10年ほど前の専門学校修了生のそれと大きく変わらない(総計では1.5単位の違いがあるが有意な差とはいえない。)といえよう。

図11は、基礎資格校での「一般・教養科目」取得単位数別の人数割合を示したもので、短期大学卒業生の場合は、専門学校修了生の場合に比べて、高い平均値と小さい標準偏差が見て取れる。

図11で15単位以下の者を「前報告」同様に「一

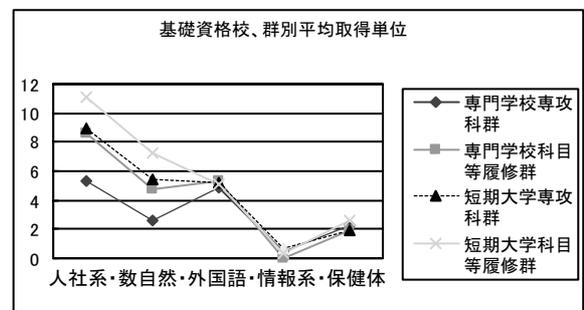


図10 基礎資格、群別平均取得単位(基礎資格校での単位修得)

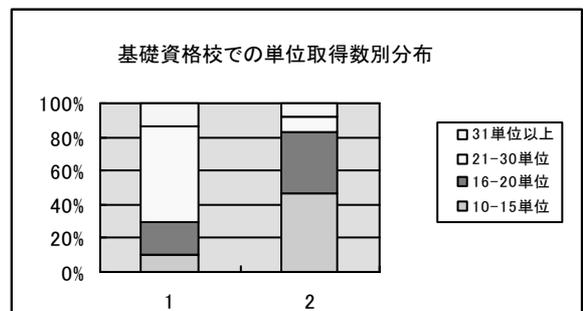


図11 基礎資格校での「一般・教養科目」取得単位数人数別割合

1. 短期大学卒業を基礎資格とする者
2. 専門学校修了を基礎資格とする者

般・教養科目」の少ない単位取得者とする。これまでに、各科目について同様な「少ない単位取得者」の割合についても触れてきたが、それらをまとめたのが図12である。何れも専門学校修了者にその割合が高いことが見て取れる。

「一般・教養科目」の少ない単位取得者に分類される申請者は専門学校の場合は31名(47.0%)であるのに対して、短期大学の場合は21名(10.5%)と大きな違いがある。専門学校の31名の内訳は専攻科群23名, 成人・科目等履修群8名, 短期大学の21名の場合はそれぞれが20名と1名である。専攻科群に占める割合がいずれも高い。最も少ない取得単位数は、短期大学の場合は11単位で、専門学校の場合の10単位と余り変わらない。このことは、大綱化の後に一般・教養教育の必須単位については、必須とする単位が少ない専門学校グループと同じ程度に必須単位を少なくさせた短期大学が存在することを意味している。

「数学・自然系科目」を3単位以下しか取得していない者の割合は両基礎資格いずれの場合も他の科目に比べて高い。他の科目の場合は割合の比が4以上なのに比べて、「数学・自然系科目」の場合は44/18と2に近い小さい値である。この少ないグループに属する者が殆ど専攻科群に属することは、看護学教育において、「数学・自然系科目」の必須単位数を少なくする傾向が短期大学、専門学校に共通にあることを示唆している。そのような申請者の単位修得表を見ると、化学の科目を学ばずにいきなり生化学を学ぶ、生物を習わず

に微生物学を学ぶなどの例が見出される。勿論、生化学の前に化学を学んでいる申請者も存在する。基礎科目を学んだ場合とそうでない場合とでは、同じ専門の科目名でも内容・レベルが大きく変わるようになる。

「前報告」において多く単位取得したと分類された31単位以上取得した者は、短期大学卒業生27名(14.5%), 専門学校修了生5名(7.6%)で、専門学校でも多数の「一般・教養科目」の単位修得している者がある程度存在していることがわかる。

積み上げ後の値は、短期大学の場合、平均すると3.5単位積み上げて27.4単位(標準偏差6.4単位)となる(図9▲印)。専攻科群の場合は平均して3.4単位積み上げて25.6単位と2単位ほど少ない。前述したように、専攻科で学びながらある大学の医学部で単位を積み上げた申請者31名は、全て10単位の積み上げを行っているが、彼らを除くと、積み上げは1.1単位ほどに下がる(△印)。成人・科目等履修群の場合は3.6単位積み上げて30.0単位となるが、標準偏差は7.2単位と全体に対する標準偏差より大きくなる。放送大学だけで単位を取得した場合は28.8単位と同じ群の中でも少し少ない。これに分類される学習者は2.2.1で述べたように放送大学で「関連科目」を平均23.0単位も取得しているためであろう。

一方、専門学校の場合は、平均すると9.5単位積み上げたため、総計で26.8単位(標準偏差14.1単位)となり、短期大学の場合と比べて余り変わらない。同じ平均値であるが標準偏差が大きく、一部の者が多く履修して平均値を上げていることが分かる。専攻科群の積み上げは平均5.7単位で、総計では20.5単位(標準偏差9.6単位)と短期大学の場合と同様に少なく、標準偏差も小さい。成人・科目等履修群では積み上げが14.1単位で総計では34.8単位と大きな値となる。この場合、標準偏差が14.7と大きいことから、全体の平均値を上げて標準偏差を大きくしているのは、一部の申請者が大学入学等で多く積み上げているためでもある。

積み上げ後においても少ない単位取得者を「前報告」と同様に20単位以下とすると、短期大学の場合20名(10%)となる。20名中14名が専攻科群で、6名(その内5名が積み上げなし)が成人・科目等履修群に属している。

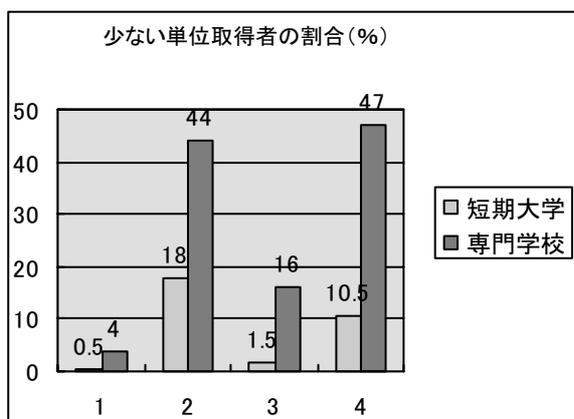


図12 基礎資格校別少ない単位取得者の割合

1. 人文・社会系科目 (3単位以下)
2. 数学・自然系科目 (3単位以下)
3. 外国語科目 (3単位以下)
4. 一般・教養科目総計 (15単位以下)

専門学校修了生の場合は少ない単位取得者は24名(36%)である。24名中22名が専攻科群に属する。積み上げ後の全体の平均値が短期大学の場合と余り変わらないのに、少ない単位取得者の割合が10%と36%というような違いがある理由としては、積み上げ前の短期大学での単位修得の底上げと、一部の専門学校修了生による多数の単位取得による平均値上げが考えられる。

基礎資格校である、短期大学と専門学校での修得とその後の積み上げ(図9の▲印)について科目分類しながら、学習歴別にまとめたのが図13である。図9の△印で述べたようにある大学の医学部で10単位を積み上げた申請者31名を除くと、3番目のグラフは1.1単位ほどに下がり、7番目のグラフと同様に両側の高さより低くなる、すなわち、専攻科群に属する申請者は基礎資格によらず、成人・科目等履修群に比べて「一般・教養科目」の積み上げが少ないといえよう。

積み上げは主として「人文・社会系科目」であることは基礎資格によらないが、その積み上げ量が、短期大学修了者の場合は全ての科目において少ない。図中3と7の専攻科群の棒グラフで、「情報系科目」が同じ程度であることが唯一の例外である。専攻科群の積み上げ単位数が基礎資格

によって異なる原因としては、専門学校では「一般・教養科目」の学修が少ないとの自覚のもとに、専攻科に進学しても科目等履修生制度によって意識してこれらの科目を学修したことが考えられる。2つの専攻科群のなかで、専攻科だけで単位積み上げた申請者の割合は同じであるからである。成人・科目等履修群において、専門学校の方が積み上げ単位数が多い理由としては、上記の理由の他に大学編入学者を多く含んでいることがあげられる。

「その他」の科目を加える場合、「前報告」では、個人差が多いので、平均値には意味が無いとして求めなかった。本報告の目的は同じ看護学の学習者の基礎資格別の比較であるので、平均値と標準偏差をあわせて記載することで、両者の比較を行った。基礎資格校ではいずれの場合も履修者が少なく、0.5単位程度なので、積み上げ単位を含めた値を記す。

短期大学卒業生の場合、「その他」の科目を入れると、全体では平均で36.3単位となり、加える前とくらべて9単位ほど多くなるが、標準偏差も14.4単位と8.0単位も大きくなり、個人差が大きいがわかる。専攻科群の場合29.1単位と少ないだけでなく、標準偏差も6.5単位と小さい。成人・科目等履修群では47.0単位と17単位増で、標準偏差も16.1単位と8.9単位も大きくなり、個人差が大きい部分は殆どこの学習歴の者が担っていることが分かる。

一方、専門学校修了者の場合は、全体で36.8単位と10単位多くなる。平均値は短期大学の場合と大きな違いがないのに、標準偏差は11単位増加し25.1単位となり、短期大学の修了生と比較して個人差がさらに著しいといえる。専攻科群の場合26.8単位、標準偏差も20.5単位とともに小さくなる傾向は短期大学卒業生と変わらない。専攻科群では平均値が基礎資格校での「一般・教養科目」の修得単位数の違いを反映して、2単位ほど少ない。一方、標準偏差は大きく平均値の76%にもなり(短期大学の場合は22%)、幅広い分布であることが分かる。成人・科目等履修群では平均49.5単位、標準偏差24.7単位となっている。標準偏差が大きいとはいえ、平均値の半分以下であり、分布はよりシャープであることが分かる。大学に編入学して沢山の他の専門の科目を取得した申請

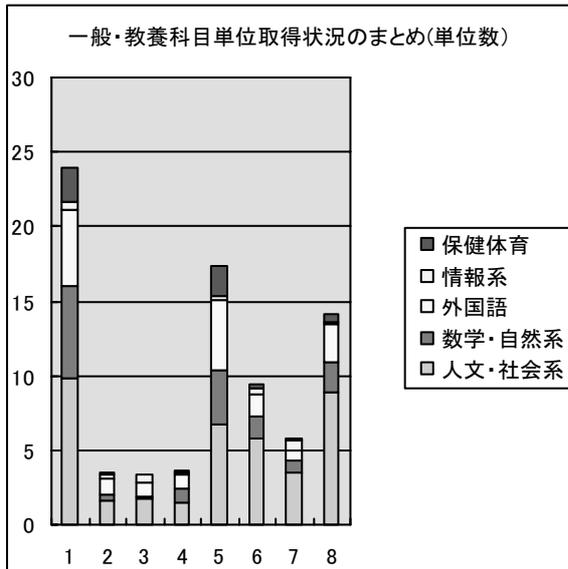


図13 一般・教養科目の単位取得状況のまとめ
 1～4. 短期大学基礎資格,
 5～8. 専門学校基礎資格
 1, 5. 基礎資格校での修得単位数
 2, 6. 積み上げ単位(全体)
 3, 7. 積み上げ単位(専攻科群)(本文参照)
 4, 8. 積み増し単位(成人・科目等履修群)

者の影響があるために、平均値は短期大学の場合より2.5単位も多く、標準偏差も大きくなったと思われる。

「前報告」と同様に、総計した単位数が20単位以下の者を少ない単位取得者とする、専門学校修了生では15人(22.7%, 最小は12単位)であった者が、短期大学卒業生では8人(4%, 最小は15単位)と割合が大幅に少なくなる。いずれの場合も全て専攻科群の申請者である。成人・科目等履修群で「その他」科目を含めた総取得単位が最小の者は、26単位(短期大学)、24単位(専門学校)である。

3. まとめと考察

平成13年度に機構に看護学を専攻区分する申請者のうち、短期大学卒業を基礎資格とする者200名の「一般・教養科目」の修得単位状況を調査・分析し、前回報告した同じ年に専門学校を基礎資格校として申請した申請者の結果と比較した。その際、学修歴(専攻科群と成人・科目等履修群)についても違いを分析した。基礎資格取得後の学習歴は、本来は積み上げ単位の取得状況に対してだけ影響する因子であるはずであるが、2.1で示したように、基礎資格校における学習時期が10年ほど異なっているため、基礎資格校での単位修得に違いをもたらす因子となることが分かった。

結果を箇条書きでまとめると次のようになる。

1) 基礎資格校での「専門科目」の取得単位数は短期大学卒業生の場合、専門学校修了生と比べて7単位ほど少なく、「関連科目」の場合は逆に3単位ほど多い。専門に特化した教育が専門学校では大きな割合をしめていることが分かる。積み上げ単位については、専攻科群と成人・科目等履修群と比較すると、前者では「専門科目」が多く、後者では「関連科目」が多いという傾向は基礎資格にはよらなかった。

国家試験合格を目指す教育機関なので、専門教育については、大差ないと言えよう。

2) 「一般・教養科目」

a) 基礎資格校での「一般・教養科目」の総取得単位数は、短期大学卒業生の場合23.9単位で、専門学校の場合の17.3単位より6.6単位ほど多い。それぞれを2つの群に分けて4つのグループを多い順に並べると、短期大学・成

人・科目等履修群(26.4単位)、短期大学・専攻科群(22.2単位)、専門学校・成人・科目等履修群(20.7単位)、専門学校・専攻科群(14.7単位)となる。一般・教養教育は短期大学では、専門学校に比べて、系統的に多く学修しているということになる。10年程度以前の学修を反映していると思われる成人・科目等履修群の差(5.7単位)より、最近の学修を反映していると思われる専攻科群の差(7.5単位)の方が大きくなっている。これは専門学校の両群の差(6単位)が、短期大学での差(4.2単位)より大きいことに対応する。4つのグループ間の違いは主に、「人文・社会系科目」と「数学・自然系科目」の違いによっている。「情報系科目」だけが、時代とともにわずかであるが増加している。個々の学習者でみると、いずれの場合にも、総数で15単位に満たない者が存在する。その多くが専攻科群に属する。各科目についても、総数についても、専門学校修了者の方がその割合は数倍高い。その一方で、専門学校においても総数で多数単位を取得している者が存在する。

b) 「数学・自然系科目」の修得単位3単位以下の少ない申請者は基礎資格に依存せず他の科目に比べて多く存在した。

c) 短期大学卒業生に比べて、専門学校修了生の方が「一般・教養科目」の単位積み上げを多く行っている。大学へ編入学した者の寄与が含まれているとはいえその結果、機構への申請時には総単位数は余り変わらなくなっている。積み上げ単位のかなりの部分は、「人文・社会系科目」であるが、これは基礎資格に依らない。

d) 積み上げ単位については、専攻科群の者は、成人・科目等履修群の者に比べて、各科目群についても、総計した場合にも、修得単位数は少ない。この傾向は基礎資格によらない。唯一の例外は、「情報系科目」で、専攻科群の方が多く積み増している。

e) 「その他」の科目については、基礎資格校での学修は少ない。積み上げ単位を加えると、総単位数はいずれの基礎資格の場合も36単位台となるが、標準偏差が大きく、その他の科

目を履修する者とし不在者が混在する形となる。いずれの基礎資格の場合も専攻科群の場合、積み上げが少なく（総計で短期大学29.1単位と専門学校26.8単位）、成人・科目等履修群の方が広く学んでいるといえる。20単位以下の少ない単位取得者は専門学校修了者にその割合が高いが、基礎資格に関係なく全員専攻科群に属する。

まず、積み上げ単位について考察を加える

濱中の行った学士取得者に対するフォローアップ調査によると⁶、看護学の学位取得者は学位取得の意味と満足度において、「幅広い教養が得られた」を80-85%と高い割合で選択している。濱中の行った調査対象となった年度においては、短期大学だけが基礎資格校で、積み上げ単位に「大学の単位を16単位以上含むこと」という縛りがある時の申請者である。従って、専攻科群の申請者でも科目等履修生制度で最低16単位を4年制大学で学んでいる。科目等履修制度で積み上げる場合は、「その他」科目を含めて広く「一般・教養科目」を学ぶ可能性が高いことが今回の分析によって明らかであり、満足度の調査結果もそれを反映したものと思われる。

短期大学卒業生の成人・科目等履修群の中で、放送大学だけで単位積み上げを行っている者と、放送大学での履修と他の大学での履修（編入・卒業をしていない）者を比較すると、「専門科目」「関連科目」の取得については有意な差があったが、「一般・教養科目」、「その他」の科目を含めて有意な差はなかった。

放送大学だけで単位積み上げた申請者、短期大学卒業生（55名）と専門学校修了生（21名）について、彼らの単位積み上げの行動に違いがあるかを調べてみた。それぞれの基礎資格校修了平均年は、短期大学、平成2年、専門学校、昭和61年で、4年強ほどの違いがある。「人文・社会系科目」（0.5, 8.9単位）、「数学・自然系科目」（1.0, 2.0単位）、「外国語科目」（1.0, 2.3単位）、「情報系科目」（0, 0.1単位）、「保健・体育系科目」（0, 0.4単位）、「その他」の科目（15.7, 14.3単位）という数値が得られた。「その他」の科目を除いて、専門学校修了生の方が多く積み上げている。特に「人文・社会系、科目」の違いが大きい。この違

いが、「専門学校では「一般・教養科目」の提供が少ない」との自覚によっている可能性が考えられる。

次に基礎資格校での学習について考察を加える。

今回の調査結果で、同じ看護学でも、短期大学卒業生は、専門学校修了生より「一般・教養科目」を6.6単位ほど多く取得していることが分かった。これは、短期大学での大綱化前の「一般・教養教育」に対する規定に基づいて学修課程が組まれていたためであると思われる。しかし、専攻科群と成人・科目等履修群の分析から、短期大学と専門学校での「人文・社会系科目」、「数学・自然系科目」の取得単位が減少し、その結果総取得単位数がそれぞれ4単位と6単位この10年ほどで減少していることが示唆された。「人文・社会系科目」は一部総合科目として、本稿では「その他」の科目として生まれ変わったのではないかと思われる兆候は認められたが、全体的な減少は明白である。図10は最近の短期大学卒業生の一般・教養教育は、10年前の専門学校レベルまで下げられていることを示唆している。

10年前との違いを生み出す原因を単に「大綱化前後」とこれまで述べたが、具体的に看護教育の指針があったかを調べると、厚生労働省内の「看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告 No.1」（平成8年3月28日）が存在した⁷。そこには「養成所が独自に教育科目を設定できるようにするため、科目名を指定せず教育内容で示し、カリキュラムの弾力化を図る」として、「基礎科目」には「幅広い人間理解と科学的思考力を高められるよう、『科学的思考の基盤』として従来の人文科学、自然科学、社会科学等の中から、『人間と人間生活の理解』として、人間関係論、家族論、カウンセリング理論と技法、外国語等から選択して科目を設定できるようにする。」とある。「養成所」とは3年制の専門学校のことである。報告書ではさらに「単位制の導入」として「3年課程については、93単位（2895時間）以上を修得することとし、基礎科目13単位（360時間）、・・・」とある。これが「一般・教養科目」の学習要件として書かれたものである。それらの科目の名称は、外国語を除いて、機構では関連科目に分類される、あるいは本報告の分類では、

「その他」の科目に分類される科目名である。改めて専門学校修了生の「その他」の単位を含めた基礎資格校での修得単位数を調べると、12単位以下は9名(14%)13単位以下17名26%となっており、少ない申請者がかなりいることが分かる。

短期大学と専門学校との比較を行ったが、機構で授与する学士の学位は4年制大学と同等であるとされているので、大学との比較も重要である。我が国の看護系大学についての調査結果では、「前報告」(日本看護系大学協議会2002年調べ)で既に表で示したように、教養の卒業要件が16-18単位の学校3校、20-24単位が14校、25-29単位が17校、30-34単位が16校、35-39単位が5校、40-42単位が2校である。加重平均すると27.2単位、標準偏差は5.8単位となる。これらの値を“積み上げ後”の短期大学卒業者の総単位取得値、全体27.4単位(標準偏差6.4単位)、専攻科群25.6単位(標準偏差5.2単位)、成人・科目等履修群30.0単位(標準偏差16.2単位)と比較すると、余り大きな違いがないことが分かる。しかし、単位数だけで判断するには注意が必要である。科目の内容等についても検討が必要かもしれない。これらは個々の教育機関の問題である。

大綱化後の平成6年に大学基準協会は教養教育に関して、大学基準協会資料第44号「看護学教育基準」(『21世紀の看護学教育-基準の設定に向けて-』(看護学教育研究委員会報告)⁸)でその基準を述べている。そこでは、「一般教養的授業科目は、看護学の専門的授業科目と有機的に作用し合っており、専門職に期待される科学的思考力、責任性、自律性、倫理性、柔軟性・国際性、総合判断力等を相補的に高めるためのものでなければならない」としている。そこに示されているカリキュラムモデル3例では、① 人間の存在そのものを対象とした学問分野 - 8単位以上、人間の営みを対象とした学問分野 - 8単位以上、自然現象を対象とした学問分野 - 8単位以上、語学12単位以上、小計36単位以上、② 人文科学、社会科学、自然科学を各8単位、語学 - 12単位、保健体育 - 2単位、小計38単位、③ 行動科学、歴史学、文化人類学、法学、倫理学、論理学・哲学、心理学、教育学、美学を各2単位、語学 - 12単位、総合ゼミ - 8単位、小計38単位となっている。①と②にある自然科学が③では総合科目に置き換わっているが、い

ずれも36単位以上となっている。その後の資料として大学基準協会資料第56号「21世紀の看護学教育」(平成14年9月)があるが、理念は変わっていない(具体的単位数は示されていない)。36単位という値は、上述した看護系大学の加重平均値より9単位近く多い。専門学校、短期大学から専攻科に進学したものにとって36単位の単位取得は、科目等履修生制度を利用しないでは不可能な数値である。

参考のために、米国の大学の看護学部の卒業要件を、ウェブサイトから求めた。アメリカのBachelor of Science in Nursingを授与する機関のリスト<http://www.allnursingschools.com/featured/bsn-degree-programs.php>から、ランダムに8校を選び、付録1に示すような卒業要件を得た。8校を平均すると、卒業要件は一般教育科目総計で40.4単位、その内数学・自然系で11.5単位となる。米国の大学では、リベラルアーツ教育の伝統があるためか、40単位を超えている。それに相当する大学は上述したように日本では57大学中2大学だけである。総計と数学・自然系科目単位は大学基準協会の例示よりそれぞれ4単位ほど多い。我が国の場合、英語圏でないために生じる外国語学習12単位を除くと、24単位となり、その違いはますます大きくなる。本分析でも明らかになったが、看護学の場合「数学・自然系科目」を3単位以下した修得しないいわゆる少ない学習者の割合が高い。短期大学の場合、積み上げても6.6単位と米国の11.5単位とは大きく離れているし、大学基準協会の値よりも少ない。我が国の個々の4年制看護系大学での「数学・自然系科目」の履修要件について具体的にどのようなになっているのか興味深い。

以上を簡単にまとめると、

- 1) 短期大学卒業生で機構に申請した者は、専門学校修了生よりも「一般・教養科目」を平均して6.6単位ほど多く学習している。「人文・社会系科目」、「数学・自然系科目」の取得単位が多いことに起因している。
- 2) 10年ほどの間に短期大学で取得する単位が平均4.2単位ほど減少している傾向が示唆された。単位修得が少ない専門学校においては6.0単位ほど減少している傾向が見られた。

それは主に、「人文・社会系科目」、「数学・自然系科目」の減少によるものであった。

- 3) 短期大学、専門学校で「一般・教養科目」を15単位以下と少ない単位修得者がいずれの場合も認められるが、その割合は専門学校の方が4倍近く多い。
- 4) 短期大学でも専門学校でも「一般・教養科目」の取得要件が少ない教育機関が存在する。
- 5) 専攻科だけで単位積み上げを行った者は「一般・教養科目」の単位積み上げを殆ど行っていない。専攻科の設置目的からして当然のことではあるが、「専門科目」や「関連科目」の学習に終始してしまう。彼らは、積み上げた結果でも24単位ほどの単位修得にしかならない。
- 6) 専攻科に進学せずに、科目等履修生制度で単位を積み上げた場合には、それなりに広く学習していることが基礎資格によらずに共通している。科目等履修によって、「一般・教養科目」を取得した結果、4年制大学と同程度の単位数を学修していることが示された。但し、これは、「大綱化前の短大での学修」と、「科目等履修」という「一般・教養科目」の学修が多くなる2つの因子が重なった結果のことである。この結論は単位数だけの比較であって、「一般・教養科目」の理念と体系性の特徴が個々の大学にあれば、同じ数でも中身が全く異なることになることは言うまでもない。
- 7) 大学との比較においては、科目等履修生として、「一般・教養科目」を積み上げることを十分にしないと単位数において少なくなる。それでも大学基準協会の例示単位数から比べると少ない値である。
- 6) 短期大学や専門学校の看護学教育において、「数学・自然系科目」の取得単位数が少ないだけでなく減少する傾向にあることは、米国での学びとの違いがますます大きく開く傾向を示唆している。英語圏でないための外国語を除くと、「一般・教育科目」の学びの違いはますます大きくなる。単位数だけで云々す

ることは危険であるが、部外者にとって気になる事実である。

謝辞

今回の分析に関して、資料の抽出等でご協力頂いた、大学評価・学位授与機構の濱中義隆助教授および井上勝裕氏に感謝する。

注

- 1) 八木 克道「専門学校修了を基礎資格とする学位取得申請者の専攻外各科目の単位修得状況調査－平成13年度申請者について」、『学位研究』, No.18, pp167-192 (平成16年)。
- 2) 吉田 文, 杉谷 祐美子「教養の専門化か, 専門の教養化か－学士課程のカリキュラムの構成状況」, 日本高等教育学会第7回大会(國學院大學, 平成16年7月)講演予稿集, pp130。
- 3) 濱中 義隆:「学士学位取得者に対する「1年後・5年後調査」の分析(3)－専攻分野「保健衛生学」を中心に－」, 学位研究, No. 17, pp155-182 (平成15年)。
- 4) 「前報告」と同様に、平成13年度2276名の申請者の中から、短期大学を基礎資格とする看護学を専攻区分とする申請者の学習歴を含めたリストを大学評価・学位授与機構、学位審査研究部の濱中 義隆助教授から頂いた。
- 5) 橋本 敏市, 森 利枝, 濱中 義隆:「学位授与機構における学位申請者の学修パターン－「単位累積加算制度」の現状と課題－」, 学位研究, No.11, pp 5-39 (平成11年)。
- 6) 濱中 義隆:「学士学位取得者の現状と意識－1年後・5年後調査の分析(2)－」, 学位研究, No.15, pp75-94 (平成13年)。
- 7) 厚生労働省ウェブサイト <http://www1.mhlw.go.jp/houdou/0804/121.html>
- 8) 「看護学教育基準」(『21世紀の看護学教育－基準の設定に向けて－』(看護学教育研究委員会報告), 大学基準協会資料第44号, 大学基準協会(平成6年7月))

付録1 アメリカの大学における卒業要件と一般・教養科目単位取得要件の事例

○ヴァージニア大学看護学部、卒業単位120単位

一般教養単位修得要件51単位とあり、内訳、英作文（3単位）、数学・自然科学（12単位）、社会科学・歴史（9単位）、人文・芸術（9単位）、選択（18単位以上、ここには、体育系やスタジオ芸術や音楽実技などの技術コースも7単位まで含めることが出来る）である。選択科目を看護学の基礎的な科目（General Education/Nursing Elective）だけを学習したとすると、看護学に特化しない一般教養科目の総計は最低33単位となる。

○セントルイス大学看護学部、卒業単位126単位

例示カリキュラムを見ると専門外59単位であるが、その内、看護学に特化したような栄養学、微生物学とか、人間発達学のようなものを除いた一般教養的科目を挙げると、人文系（27単位）、社会科学系（6単位）、数学・自然科学（11単位）の総計44単位となる。

○ウイスコンシン大学（ミルウオーキー）看護学部 卒業単位124単位

一般教養単位修得要件49単位で内訳は英語（3単位）、物理・化学（11単位）、社会科学・歴史（11単位）、人文・芸術（9単位）、生物科学（14単位、そのうち微生物学、栄養学、生化学を除いた一般の生物学で1年レベルの単位は4単位）であり、看護に特化しない科目に限ると、総計39単位となる。情報系の技術知識は習得していることとして求めているが、関係するカリキュラムの提供はない。専門学校・短大での理系科目の修得が少ないことが明らかとなっているが、この大学では、高校での学習要件に、情報系を半年、生物、物理、化学を各1学年、数学を3学年分の学習を求めている。

○ヴァージニアコモンウエウエルズ大学看護学部 卒業要件120単位

一般教養科目修得要件を代表的カリキュラムをみると、英語（6単位）、数学・自然科学（11単位）、人文社会科学（19単位）で、総計36単位となる。

○ゴンザカ大学看護学部 卒業要件128単位

カリキュラムには、大学コア31単位、専門コア36単位、看護専門67単位とあるが、大学コアのなかには、看護倫理のような400番台（4年生レベル）の科目も含まれているので、全てを見直してみると、英語（5単位）、人文・社会科学（12単位）、統計・自然（15単位）、宗教（6単位）となっている。総計で宗教（必須）をいれると38単位となる。その他15単位が一般/専門選択となっている。

○サンフランシスコ大学看護学部、卒業単位128単位

コミュニケーション（8単位）、数学・自然（8単位）、人文科学・歴史（20単位）、社会科学（4単位）総計44単位と書かれている。その他に1年生レベルで看護に特化した科目として、心理学（3単位）、微生物学のような看護サポート自然科学12単位がある。

○サムフォード大学看護学部 卒業単位128単位

内、General Education Credit54単位とあるが、代表的カリキュラムでは、人文・社会科学（20単位）、数学・自然（8単位）、健康（2単位）、一般課目（4単位）、聖書（4単位）の総計38単位が挙げられている。

○ニューヨーク大学看護学部 卒業単位128単位

内、代表的なカリキュラムをみて分類すると、人文・社会科学（27単位）、英語コミュニケーション（12単位）、数学・自然（12単位）総計51単位となっている。

（受稿日 平成17年1月17日）

[ABSTRACT]

The Result of Surveys of Credits of General Education Courses Accumulated
by Applicants in Nursing who Completed Junior Colleges
in Comparison with Those who Completed Special Training Colleges

YAGI Katsumichi*

In the previous report entitled "Results of Surveys of Credit Accumulation for General Education Courses by Applicants who Completed Their Studies at Special Training Colleges (hereafter, STCs)" (Research in Academic Degrees (2004) vol.18. pp167) it was shown that applicants to the National Institution for Academic Degrees and University Evaluation (NIAD-UE) for bachelors degrees in nursing took general education courses of about 17.3 credits at STCs. This should be compared with those who completed their studies in nursing at junior colleges (hereafter, JCs).

This report presents the results of surveys of credit accumulation at JCs. The applicants are divided into two groups depending on credit-acquisition methods after finishing JCs: one composed of applicants who enrolled in NIAD-UE recognized advanced courses of JCs (hereafter, "adv. course applicants"), and the other where applicants earned credits through non-matriculated credit-based students' programs at universities (hereafter, "N-M applicants", who were found to have had finished JCs about 10 years in average earlier than adv. course applicants). It was shown that the adv. course applicants and the N-M applicants from JCs earned 4.9 and 9.1 credits, respectively (average of 6.6 credits) over those of applicants from STCs. The differences were found mainly in humanities & social sciences and mathematics & natural sciences. A reexamination of the previous analysis also showed that the N-M applicants from STCs earned 6.0 more credits from STCs than the adv. course applicants. From these facts, it was found that credits of these two groups of courses earned at the two types of colleges decrease with time.

It was also shown that the N-M applicants acquisitioned more credits for general education courses after finishing colleges than the adv. course applicants. In total, including credits earned in colleges, the adv. course applicants command an absolute majority in the group where applicants earned less than 20 credits for general education courses, irrespective of the type of college.

The results were briefly compared with general education requirements in universities in Japan and the USA.

* Professor, Faculty for the Assessment and Research of Degrees, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation